

二〇一二年 度

第一回 全統高一模試問題

国語 (八〇分)

二〇一二年五月実施

試験開始の合図があるまで、この「問題」冊子を開かず、左記の注意事項をよく読むこと。

注 意 事 項

- 一、この「問題」冊子は、21ページである。
- 二、解答用紙は別冊子になっている。(受験届・解答用紙)冊子表紙の注意事項を熟読すること。
- 三、本冊子に脱落や印刷不鮮明の箇所及び解答用紙の汚れ等があれば試験監督者に申し出ること。
- 四、試験開始の合図で「受験届・解答用紙」冊子の国語の解答用紙を切り離し、所定欄に氏名(漢字及びフリガナ)、在学高校名、クラス名、出席番号、受験番号(受験票発行の場合のみ)を明確に記入すること。
- 五、試験終了の合図で右記四、の 〇 の箇所を再度確認すること。
- 六、答案は試験監督者の指示に従って提出すること。

河合塾

クラス		受験番号	
出席番号		氏 名	

□ 次の文章は、一九六六年に発表された日野啓三『ベトナム報道』の一節である。筆者は、ベトナム戦争下のサイゴン（現在のホーチミン市）に、新聞社の常駐特派員として派遣されていた。これを読んで、後の問に答えよ。（配点 八十点）

人間の書く文章に、無私の客観的文章というものは存在しない。

純粹な自然現象、たとえば太平洋上に熱帯性低気圧の発生といった場合ならそうかもしれないが、たとえば台風が上陸して被害を及ぼすと、すでに気象台の予報に対する批判、日頃の予防 **A** に対する批判、救助作業、復旧作業に対する批判などの主観性がどうしても混入される。

また、ダンブカーが横断歩道を通行中の小学生をひき逃げしたような、誰も共通の判断をもちうる事件ならいいが、米原子力潜水艦の日本寄港となるとすでに何を書かないか、たとえば中国に対する脅威と、その反作用を書くか書かないかによってひとつの主観的立場の表現となる。

したがって多少とも人間にかかわる事件の場合、事件に対して万人共通の自明の判断と評価を下しえないような場合には、主観的であることを意識するかしないかのちがいでしかなくなる。そして客観的だと信じこんでいる無意識の主観性こそ、最も読者を誤るものである。

ベトナム報道はいわば熱帯性低気圧の発生や、小学生のひき逃げ事件のほとんど対極にくる反対の意味で特別な例であろう。さらに微妙なことは、交通事故や火事のように、一回きりで完了する事件ではないことである。一つの事件はさまざまな過去のからの加速度、歪み、行きがかり、恨み、幻滅を幾重にも負いながら、将来への複雑な思惑、期待、試行、失敗覚悟の絶望的行動、**B** 戦術、牽制作戦、**C**、アリバイづくりなどの諸要素を内在させながら不断に広がって変化する。

誰が書いてもほぼ同じ記事ができる事件の方がむしろ特殊な例であって、観測主体との相互作用を無視して対象そのものの姿を捉えることはできない。ベトナム戦争のように対象の姿は石塊のように明確ではなく、不断にうごめきまわるアミーバの不定形のうごめきを確率的に示唆することしかできない、という動乱カチウウの政治的事件の方が、世界の基本的な在り方

ではないかと私は考える。

したがって本来、客観的なはずの新聞報道のあり方が、たとえばベトナム報道の場合「偏向」しているといった批判は、世界とその認識（報道も認識のひとつのあり方だ）についての逆立ちした考え方³に由来する。報道者自身の主観がにじみ出てくるベトナム報道の、不安で不確定な報道の姿こそ、実は最も本来的な認識と報道の在り方だといわねばならない。

私は多くの書齋的批判者の不満を承知のうえで、私自身の不安な六カ月の体験の全重量をこめてあえていう——客観的だと思ひこんでいる鈍感な報道者の、実は主観的な報道より、完全に客観的ではありえないことの限界を鋭く自覚したうえで、主観と客観の相互作用のより生き生きとしたあり方にキョシン^bに務めることの方が正しいのだ、と。

日本では通信員という制度が一般化していないが、アメリカの場合ストリンガー（通信員）とコレスポンデント（特派員）との区別は実にはつきりしている。

ストリンガーとは、材料の断片の提供者にしかすぎないが、コレスポンデントはそれ以上のもの、つまり情勢の全体の動きのイメージの中でニュースを捉え、またニュースの意味と見通しを書くことのできる報道者のことだ。だからストリンガーは幾つかの社をかけもちできるが、コレスポンデントは原則として一社専属である。意味づけと見通しは主観的な作用だが、その主観が単なる既成の図式や観念のおしつけ、個人的でしかない感情のロシュツ^cではないことを信頼されたものが、コレスポンデントの資格を与えられる。

私たちは私たちに単なるストリンガーでないことを証明しようとした。事態そのものに即しながら、その意味づけと見通しの中に「自分」をこめる。といっても実際には、すでもっている自分の見通しを事態に押つけるのではなく、一定の期間内の事態の動きをできる限り綿密に追って、その体験から自分の見通しを少しずつ形成してゆき、眼前の状況の動きとすでに生まれかけている自分の見通しの間で、活発な相互作用を働かせる。

そのような意味と仕方において、いやしくもコレスポンデントは、正しく主観的であることをおそれるべきではないし、真の生きた客観性とは正しく主観的であることなのだ。そしてサイゴンで生き生きと主観的であることの誇りは、火事の記事を

書いたり、情勢の断片を右から左に送り伝えるだけの貧しい客観性にくらべるとき、いかに不安にみちていることか。

降下部隊と乱闘警官隊に包囲された仏教徒の本部は、無人の大通りのほりっっぽい陽炎かげろうの向うで、ひっそりとしずまり返っていた。中の指導的な僧五人の断食は、一週間目に入っていた。二人ほどの僧がかなり衰弱しはじめているといううわさが、しきりに流れていた。ゼネストの指令は失敗に終わって、二月初めの旧正月をひかえて、市場には色鮮やかな果物や祝いの加工食品が山をなしていたし、旧正月に飾る鉢植えの花をならべて、花市が街頭に並んでいた。

だが、米大使館スプークスマンが、北部の仏教徒の動きがキューバクdしていることを明らかにしていたし、グエン・チャン・ティ第一軍団長がデモや壁にスローガンを書きなぐるのを禁止する命令を出したにもかかわらず、反米スローガンがあとをたたく、反政府デモに兵士たちまで加わりはじめたという情報が伝えられていた。そしてあるベトナム人記者はいった。

「ティ將軍はそれを見て見ないふりをしてるぜ。このことは□□深長だよ」

サイゴンでもグエン・カーン司令官がひそかに仏教徒指導者たちと連絡をとって、何ごとか□□Deしているらしいという情報は何カ所からも伝わってきた。

「仏教徒と軍の間には何かがあるな」
と林記者がいった。

「ぼくもそう思う。そしてその結び目は」
とぼくは答えた。

「おそらくタム・ジャク師だ」

タム・ジャク師は東京の大正大学に留学したことがあり日本語が少しでき、昨年末から従軍僧組織の責任者として、陸軍中佐の肩書きをもらって軍提供の従軍僧本部の建て物にいた。だがこの容貌魁偉ようぼうかいいなる僧は統一仏教会のキャンプの一人でその方でも政治的に動きまわっている。電話の不便なこの市では、足でさがしまわるしかない。翌朝早く若い林記者は下宿をとり出し

てゆき、昼すぎ興奮して戻ってきた。

「間違いない。將軍と坊主は密約を結んだ。タム・ジャク師はそれを否定しなかった。ただその内容は公表されるまで伏せておいてくれということだ。代わりに国連事務総長にアピールの電報を打ってくれと頼まれた。彼らの動きは全部チェックされて打てないというんだ」

「よかった。で、その内容は」

「軍が政府を倒してやる。その代わり仏教徒は今後二年間、反政府デモをやらないという約束だ。間違いない。政府は倒れるぞ」

「よし、打てよ。きみのスクープだ」

そして林記者は短かく反政府クーデターヒツシの記事を打った。どこの外電もまだ打っていない、いわば国際的なスクープだった。彼が怪僧タム・ジャクを探し出して聞き出したスクープにEを表して私はその日は打たなかった。林記者が止めたわけではない。むしろ彼は一緒に打とうといったが、他人の努力のFにただで乗っかるのは私の趣味に合わなかった。

翌朝私は別の筋でその密約説をあらためて確かめてから、情報としてではなく、全般的に現在の政府はゆきづまって倒壊の運命にあること、だが武器もない仏教徒は、自分たちだけで武装した権力を倒すだけの力のないこと、一方將軍たちも現在の形式だけの民政には不満なことという条件をあげて、したがって当面両者の利害は一致し、協同して倒閣に動く必然性は濃厚である、との論理的判断を骨組みにして長い記事をかいた。

この現状認識と推理には自信があったが、困ったのは倒閣のタイミングの問題で、「近い将来」とするか「間もなく」とするか「こんみょうちゅう今明日中にも」とするかでしばらく迷ったあげく、いわば拝み討ちの気持で「こんみょうちゅう今明日中にも」と打った。

「明日か明後日までには倒れてくれないと困るな」

と私は林君にいった。

翌二十七日午前、私たちは国営ベトナム通信社にふらりと顔を出した。別に期待があったわけではない。ところが一階の編

集局に入つてゆくと、室内は異様に緊張していた。編集局長が一枚の印刷物を渡しながら興奮した表情でいった。

「いま、これがまわつてきた。カーン將軍の布告だ。正午に放送される。フォン政府は吹きとんだ」

私たちは急いでメモノートを取り出した。親切な局長はベトナム語の布告文の内容を英語に訳してくれた。お礼もそこそこに二人は転がるように外に出た。

「やったぞ」

下宿に帰つて階段も二段ずつとび上がると、すぐにタイプに紙をはさんだ。昼食もぬきに片手にバナナをかじりながら思いきり打ちつづけた。

その夜、私は吐き気のするほどの疲労をこらえて、もう一本電報を打った。政府は倒れ仏教徒の反政府運動はこれで終わったが、この終幕はそのまま新しい劇の幕あきだ。カーン將軍が新しい台風の眼となるだろう——と私は書いた。

通行禁止時刻間近く深夜の街を輪タクで電報局から戻りながら、二十日の仏教徒の断食闘争開始以来の、長かった一週間を思い浮かべた。

私はひとりでニヤリとした。昨日の電報も「今明日中」で当たったわけだ。心からよかったと思った。

だが一週間もたてば、私のそんな記事など書いた本人以外だれもおぼえてはいまい。ソウルのときも、学生たちが統一運動に動き出したと初めて記事にしたのも私だったが、帰ってからそのことを言いかけたら、デスクの誰もがそんなことがあつたつけという顔をした。

今度だつて帰ったとき、いまこうして不安に駆られながら打っている私の記事のことを、おぼえているものは誰もいないだろう。急に疲労がにじみ出てきて、濃い胃液が胃壁を灼くのがわかった。

「むなしなものだな」と思わず声に出していった。止まれといわれたと思つたらしく運転手があわててブレーキを踏んだ。「ちがうよ。こつちのことさ、デイー・タム、デイー・タム（真直に行け）」と私は大声でどなった。そうだ。私自身も、もはや

デイー・タムしかない。この悪夢のような濃く重い混乱の中を。

(注) ○アミーバ……アメーバ。

○ゼネスト……一斉に行われる大規模なストライキ。ゼネラル・ストライキ。

○スポークスマン……広報官。

○輪タク……自転車の側面や後部に箱形の客席をつけた乗り物。二輪車タクシー。

○ソウルするとき……筆者はベトナムに来る前、軍政下の韓国ソウルで特派員を務めていた。

問一 傍線部 a ~ f のカタカナを漢字に改めよ（楷書で正確に書くこと）。

問二 空欄 A F に入れるのに最も適当な語を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。ただし、同じ

ものを繰り返し用いてはならない。

ア	布石	イ	陽動	ウ	画策 <small>かくさく</small>	エ	措置 <small>そち</small>
オ	敬意	カ	遠慮	キ	尻馬	ク	調子

問三 波線部 X・Y の空欄 にそれぞれ漢字を入れ、四字熟語を完成させよ。

問四 傍線部 1 「無意識の」とあるが、これと文脈上ほぼ同じ意味で使われている単語として最も適当なものを、本文中から抜き出して答えよ。

問五 傍線部2「特殊な例」とあるが、それはどのような場合か。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 熱帯性低気圧の発生などのように自然界で発生した事件や、人間がまったくかわることなく発生したと判断できるような事件の場合。

イ 純粹な自然現象や、その自然現象が人間に対して被害を及ぼしたときのように、それらについて誰が書いても同じ記事ができると考えられる事件の場合。

ウ 万人が同じような自明の判断や評価を下すことはできないが、それについて書いた記事が読者を誤らせることはないような事件の場合。

エ 人間とはまったく無関係に生じた事件や、人間がかかわったとしてもそれに対する人々の見解がわかりきっていると考えられるような事件の場合。

オ 人間がかかわってはいるが、それに対する万人の判断は自明であり、その結果としてまるで自然現象であるかのように感じられる事件の場合。

問六 傍線部3「逆立ちした考え方」とあるが、どのような点で「逆立ち」しているのか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 世界は認識によって見えてくるものであるにもかかわらず、あらかじめ対象として存在している世界を人間が客観的に捉えるべきだと考えている点。

イ 新聞報道は基本的には客観的で偏向していないものであるにもかかわらず、それを偏向したものであると見なし、まっぴらにする点。

ウ 世界を認識するという行為は世界をできるだけ客観的に捉えることであるはずなのに、それを主観的な行為であるべきだと取り違えている点。

エ 報道とは不安定で不確定な世界の姿をありのままに伝えるものであるはずなのに、それを世界の変化を確率的に示唆することだと捉えている点。

オ 不安定で不確定な世界を認識するという行為そのものが主観的なものであるはずなのに、それを主観と客観との相互作用だと勘違いしてしまっている点。

問七 傍線部4「長い記事をかいた」とあるが、こうした記事を書いた筆者のなかには、報道についてのどういう考え方があのか。本文に即して九十字以内（句読点や記号も字数に含む）で説明せよ。

問八 傍線部5「私は大声でどなった」とあるが、ここでの筆者の思いや態度を説明したものとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 明日はどうなるかもわからないという状況に耐えつつ、不安に駆られながらも命がけで自分の信じる報道を続けているが、にもかかわらず自分の仕事の評価されていないことにむなしさと憤りを覚え、周囲を見返すためにはいまの仕事が続けていくしかない、思いを新たにしている。

イ 疲労のなかでふと口にした言葉が運転手に誤解してしまったことと、自分が全身全霊を傾けて書いた記事が正しく評価されていないことを心の中で重ね合わせ、なんともいえない空虚な思いを感じているが、そんななかで自分を奮い立たせ、自ら信じる生き方を貫いていこうとあらためて決意している。

ウ 不斷に変化していく混沌こんとんとした状況のなかに身を置き、自分の信念にしたがって報道を続けていくなかで、激しい不安や疲労だけでなく、誇りやそれと裏返し of 虚無感すら覚えているが、いまさら後に引くこともできないという思いも強く、そうした思いを自分自身に言い聞かせるようにしている。

エ 次から次へと新しい事件が起こり、それらについて書いても書いても追いつかず、しかもその記事が正当に評価されないという状況のなかで、むなしさを感じるとともにやや自暴自棄な気分になら陥ってしまい、心身を疲労が覆いつくすなかで思わず心にもないことを口にしてしまっている。

オ 自分の信じる報道のあり方にしたがって記事を書き送りつづけてもそれが認められないという状況のなかで、強い疲労感やむなしさを覚え、自身の報道に対する考え方もゆらぎは始めているが、そうした精神的混乱からどうにかして立ち直ろうと、虚勢を張って自らを鼓舞しようとしている。

問九 傍線部6「悪夢のような濃く重い混乱」とあるが、戦時下のベトナムに代表される「混乱」のようすを比喩的に言い表した二十五字以内（句読点や記号も字数に含む）の語句が、本文中にある。その語句の最初と最後の三字を答えよ。

問十 筆者の考えに合致するものとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 事件が次から次へと起こり、さらにそれらが連鎖して広がっていく戦時下のベトナムには、世界の在り方のきわめて特殊な様相が現れている。

イ コレスポネントとしての報道記者は、正しく主観的であることをおそれてはならず、個人的な感情も記事のなかで積極的に表現していくべきである。

ウ 他人の努力の結果を横取りし、それを自らの手柄にしてしまうというような行為は、報道に携わるすべての者にとって許されざる行為である。

エ 報道にとって必要なのは正しい主観性をもったコレスポネントであり、貧しい客観性しかもてないストリンガーは、基本的には不要な存在である。

オ 自らの書くものが主観的にならざるをえないことを充分に自覚した者の報道と、そうでない者の報道との間には、必然的に大きな隔たりが生じる。

国語の問題は次の頁へ続く。

二 次の文章は、ある小説家によって書かれたものである。これを読んで、後の問に答えよ。(配点 六十点)

先日、雲仙^{うんぜん}から長崎へ行ってきた。桜と菜の花の真っ盛りであった。島原鉄道の愛野^{あいの}という駅から家なみや菜の花畑を登っていくと、片側^{あしあけ}に有明海、反対側に千々石湾と、二つの海を遠く見おろせる高地へ出る。いわば雲仙高原の北端、島原半島のつけねに当る場所で、いかにも〈愛野〉という名前にふさわしい優しい[A]光の土地である。

私はかつて学生のころ、やはり諫早^{いさはや}から雲仙への往復に、ここを通ったことがあるが、今はその時と比べ、同じ場所と思えない不思議な気持ちに襲われて足をとめてしまった。このまえば朝鮮戦争のころで、雲仙北東部をぬけ天草の島々をのぞむ峠へ出た。その体験は「深い河」という作品の素材にもなったが、今同じ道すじを奥へ行っても、かつての放牧場や森はなく、ふもとから赤いトタン屋根の住宅や商店がはいあがってきている。長い時間が土地のすがたを変えるのは当然というものの、私には雲仙連峰の山はだ、有明海の海の色まで初めてのように妙に違ってみえた。私の記憶にあるのは、どこか自然のエロスを感じさせるような濃密なひのき樹林のうねり、緑の草原、水銀色にきらめく有明海だが、今あるのは柔かい陽光に眠るようにかすむ風景である。あれが朝鮮戦争の熱い夏であり、今が平和な春の季節だからだろうか。たよりないのは私の記憶なのか。それとも外側の存在の方が変わったのか。

しかし、たぶんだれでもよくあるように、その時私の感覚では、過去の自然や[A]光の方が鮮明な手ごたえがあり、目のまえの現実の方が不確かで稀薄なように思えていた。私は現実の感覚を確かめるためにその高原を歩いて、一本の木でも小道でも過去をよびさまして現在とつなげようとし、まるで時間の旅をしているような気持ちになった。

だが、考えてみれば、日常生活のなかでも、私たちの想念は一瞬一瞬過去と現在のあいだを揺れ動いているようだ。現在は必ず[B]淡さまざまに過去の時間に染まっている。¹こうした形でしか、自分も外部も存在のすがたを現さない。私たちの内部に刻々と生起する記憶や想念は万華鏡のようだが、そこから一つの確かな対象への認識をつかみとろうと、私たちは鋭いアンテナをさぐっている。私は山道を歩きながら、こうした過去と現在の多層の時間を感じると、²今ここからもう一つ小説を書き出

さねばならないと思いはじめた。

しかし、私たちの中で、自分や外側の存在が絶えず過去に浸透されて現れる時、それらへの確かな認識とはどうして得られるのだろうか。私たちはしよせん、事物の相対的な像、非決定の沼のなかに陥るだけなのだろうか。だが反面、言葉をもつ人間はそんな世界を超えて、絶対的な認識の場をもとめるように仕組まれている。これは結局は、「存在」と「認識」という思想上の大きな命題になるのだろうか。

けれども私は、雲仙の春の暖かい日ざしの下に立って、こんな難問を考える気はしない。ただこの高原も海もおだやかな優しい風土をながめ、そこに眠る過去を、はるか昔までナマナしくよびさますだけである。

この南国の海べは、ちょうど記紀の〈神々〉の世界を思い起すにふさわしい。イザナギとイザナミが、天の浮橋うきはしから天の沼ぬ矛ぼで下界をかきまわしてできた島。そして二神で生んだ海と山。こういう伝承の世界を創りあげた古人には、神々が在るかとかという「認識」よりもまずそれが自然の中に生きていねばならないものだったろう。そういう人間を超えるものの存在を問うよりも、まず自分たちの内からあふれ出てくる衝動のなかで、神々を生かしめる。それがなくては、彼らの生活も共同社会も成り立たなかったろう。

たぶんこれは汎神論aの風土も、一神教の風土も変りない。イスラエルやインド、エジプトや南太平洋。このへだたった原始社会のどこにも、まず人間を超えた存在を生活と密着した中で生み出していることに、私はむしろ感嘆する。いかに人間の衝動の根源が、超越的なものを必要としているかが感じられる。しかし、それはオセアニアの原始芸術を見てもわかるように、彼ら未開人にとってメタフィジカルな観念ではなく、物象や自然と一体化し、きり離せない存在であった。木ひとつにも神性があり、それで祖先像を彫るとき、霊身一体のものとして祭儀の中心になった。その彫像や仮面は、見るだけでも彼らのたくましい生命力を伝えてくる。すくなくとも、現代人のようにメタフィジカルな観念を肥大させ、検証し、物や自然へのかかわりのやせ細る衰弱はない。

私はまた山道をひき返し、車で島原へ向いながら、そんなナマナましい生命力を日本の古代人の上に想像した。むろんオセアニアとは異質だが、記紀や万葉の祖先たちにも超越的な根源衝動が息づいていたろう。それはどんなものだったか。おそらく時間とともに、この風土に溶け、私たちの血の中に溶けこんでいることだろう。だから、今かえって自分たちがそれに慣れきり、無自覚になっているに違いない。しかし、とすれば、その分厚い時間に**穿孔**をあげ、深い根の層を現在によび戻してくるのは、小説書きの仕事ではなからうか。そういう意識の底に眠っている血を、新鮮に回復させ、現代に通わせることが私たちの仕事ではなからうか……。

私がそんなことを考えていると、車はいつの間にか島原のまちをぬけ、雲仙の南部を登る道路に出ていた。私はその峠の高みから、明るい海峡がひらけるのを見ると、思わず車をとめて外へ出た。桜の花びらが、絶えず**風花**のように流れてきた。私は目の前の海の向うに、天草の島々が浮ぶのを見て息をつめた。足もとから海辺へひろがる濃緑の針葉樹林。段々畑。漁師の家々。水銀色にきらめく海峡。そこに初めてあの学生時代の過去の時間がよみがえってくるのを感じた。天草の山影が日のかに紫紺色に浮び、中腹だけ雲がたなびいているのは大和絵のようだ。そこにはまぎれもない日本の優雅な自然があった。

（田久保英夫「時間の旅」）

（注）○メタフィジカルな……形而上の。物質的な次元を超えた。

問一 傍線部 a i d の漢字の読みを、ひらがなで答えよ。

問二 波線部「万華鏡のようだ」と同じ表現技法を用いているものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 道草をくう

イ 人間は考える葦である

ウ 光陰矢のごとし

エ 必要は発明の母である

オ 甲乙つけがたし

問三 空欄 **A**・**B** (**A** は二箇所ある) に入れるのに最も適当な漢字一字を、それぞれ答えよ(楷書で正確に書くこと)。

問四 傍線部 1「こうした形」とあるが、「こうした」の内容が最も端的に言い表されている二十五字以内(句読点や記号も字数に含む)の箇所を傍線部以降の本文中から抜き出し、その最初と最後の三字を答えよ。

問五 傍線部2「今ここからもう一つ小説を書き出さねばならないと思いはじめた」とあるが、これについて、次の二つの問に答えよ。

(1) 筆者がこのように「思いはじめた」のは、どのようなことがあったからか。本文に即して百字以内（句読点や記号も字数に含む）で説明せよ。

(2) 筆者は「小説を書く」くこの意味をどのようにとらえているか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア ナマナマしい生命力をもっていた日本の古代人のあり方を、現代人の想像の裡うちによりがえらせることによって、日本文化の固有性を高らかに宣言すること。

イ 現代人が自覚できなくなっている、自然のなかで生きてきた祖先たちが生みだした超越的な存在や、それへの衝動といった根源的なありようを、現代において覚醒させ活かすこと。

ウ 「存在」と「認識」という思想上の大きな命題にひるむことなく、事物を固定的に表す言葉をもつ人間の代表として、命題解決の糸口を明らかにしていくこと。

エ 自然との出会いという、作品創造の契機となりうる希有けいうな体験を、文学作品に結実させることによって、自己の存在そのものを更新すること。

オ さまざまな古代社会に存在する超越的な根源衝動の内実を明らかにしていくことによって、人間を超えるものの存在に対する認識を深めようとする事。

問六 本文についての説明として正しいものを、次の中から二つ選び、記号で答えよ。

ア 旅で見た風景に対する感慨からはじまり、自分にとって切実とは思えない抽象的な議論に陥ることを避けつつ、話題は人間のあり方や現代が抱える問題といったことにまで及んでいる。

イ 観念のみを肥大させた現代人と、おおらかな古代の人々との違いが詳細に述べられており、そのことを通じて美しい自然を喪失した現代人の悲哀が浮き彫りになっている。

ウ 美しい日本の自然を背景に、筆者は自在に思うことを綴^{つづ}っていくが、そうした独特な筆致の奥には、小説家としての自負のようなものがかいま見られる。

エ 一種の旅行記という体裁をとりながらも、それを書いている筆者は外界に目を向けることをせず、自身が抱える解決することの難しい問題にとらわれてしまっている。

オ 風景の繊細な描写と哲学的な思考が交互に配置されるという本文の構成は、文学と哲学のいずれかを選択せねばならない筆者の状況をはからずも示している。

カ 旅先でふと覚えた違和感の原因を丹念に辿^{たづ}りつつ、話題は筆者の個人的問題を超えて、誰しもが自覚している現代に特有の問題へと広がっている。

【三】次の文章は『今昔物語集』の一節で、ある男が鬼の一行に偶然出遭い、他人から姿が見えなくなってしまう呪いをかけられた場面に続く箇所である。これを読んで、後の問に答えよ。（配点 六十点）

さて、日ごろを^ふ経るに、せむかたなし。しかれば、男六角堂に参り籠りて、「観音、我を助け給へ。年ごろ、たのみをかけ奉りて参り候ひつる^し験には、もとのごとく我が身をあらはし給へ」と祈念して、籠りたる人の食ふ物や金鼓の米などを取り食ひてあれども、かたはらなる人知ることなし。

かくて二七日ばかりにもなりぬるに、夜寝たるに、^{あかつき}暁方の夢に、御帳の辺、^{たふと}貴げなる僧出でて、男のかたはらに立ちて告げてのたまはく、「^{なんぢ}汝、速やかに朝こよりまかり出でむに、初めて会へらむ者の言はむことに随ふべし」と。かく見るほどに、夢覚めぬ。

夜明けぬれば、まかり出づるに、門のもとに牛飼童のいとおそろしげなる、大きな牛を引きて会ひたり。男を見て言はく、「いぎ、かの主、我がともに」と。男これを聞くに「我が身はあらはれにけり」と思ふにうれしくて、喜びながら夢をたのみて童のともに行くに、西ぎまに十町ばかり行きて大きな棟門あり。門閉ちて開かねば、牛飼、牛をば門に結びて、扉のはさまの人通るべくもなきより入るとて、男を引きて、「^{なんぢ}汝もともに入れ」と言へば、男「いかでかこのはさまよりは入らむ」と言ふを、童「ただ入れ」とて男の手を取りて引き入るれば、男もともに入りぬ。見れば、家の内大きにて、人きはめて多かり。童、男を具して板敷に上りて内へただ入りに入るに、「いかに」と言ふ人あへてなし。はるかに奥の方に入りて見れば、姫君、病になやみわづらひて臥したり。跡枕に女房達居並みて、これをあつかふ。童、そこに男をゐて行きて、小さき槌を取らせて、このわづらふ姫君のかたはらに据ゑて、頭を打たせ腰を打たす。その時に、姫君、頭を立てて病みまどふこと限りなし。しかれば、父母「この病、今は限りなめり」と言ひて泣きあひたり。見れば、誦經を行ひ、また、やむごとなき験者を請じに遣すめり。しばしばかりありて験者来たり。病者のかたはらに近く居て心経を読みて祈るに、この男、貴きこと限りなし。身の毛いよたちて、そぞろ寒きやうにおぼゆ。しかる間、この牛飼の童、この僧をうち見るままに、ただ逃げに逃げて外ぎまに

去りぬ。

僧は不動の火界の呪を読みて病者を加持する時に、男の着る物に火付きぬ。ただ焼けに焼くれば、男、声を挙げて叫ぶ。しかれば、男まあらはになりぬ。その時に、家の人、姫君の父母より始めて女房ども見れば、いといやしげなる男、病者のかたはらに居たり。あさましくて、まづ、男を捕へて引き出だしつ。「こはいかなることぞ」と問へば、男、事の有様をありのままに初めより語る。人皆これを聞きて「A」と思ふ。しかる間、男あらはれぬれば、病者かき拭ふやうに癒えぬ。しかれば、一家喜びあへること限りなし。その時に、験者の言はく「この男、咎あるべき者にもあらずなり。六角堂の観音の利益を蒙れる者なり。しかれば、速やかに許さるべし」と言ひければ、追ひ逃がしてけり。しかれば、男、家に行きて、事の有様を語りければ、妻「あさまし」と思ひながら喜びけり。かの牛飼は神の眷属にてなむありける。人の語らひによりて、この姫君に憑きてなやましけるなりけり。

(注) 1 六角堂……現在の京都市中京区にある頂法寺。本堂が六角であることからの呼び名。本尊は如意輪観音。

2 金鼓……金属製の仏具である鉦。これを叩いて托鉢して回る。 3 二七日……十四日間。 4 十町……約一キロメートル。

5 跡枕……足元と枕元。 6 限りなめり……最期であるようだ。

7 験者……加持祈禱をして、病を治したり悪霊をこらしめたりする僧。 8 心経……般若心経。

9 不動の火界の呪……不動明王を念じて唱え、火焰を出現させて悪霊を退散させる呪文。

10 神の眷属……悪神の従者。 11 人の語らひ……誰かの依頼。

問一 二重傍線部 a 「我」・ b 「汝」・ c 「我」・ d 「汝」のうち、異なる人物を指すものを一つ選び、記号で答えよ。

問二 傍線部 1 「我が身はあらはれにけり」とあるが、実際はここで男の姿が他人から見えるようになったわけではない。その姿が本当に他人から見えるようになったことが最初にわかる箇所を、本文中から十字以内で抜き出して記せ。

問三 傍線部 2・3・5・7 の意味として最も適当なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

2 「たのみて」

ア 信頼して イ 抱いて ウ 思い出して エ 実現して

3 「あへて」

ア なかなか イ まったく ウ ほとんど エ やはり

5 「やむごとなき」

ア 真面目な イ 親しい ウ 尊い エ 有名な

7 「あさましくて」

ア 嘆かわしくて イ 大騒ぎをして ウ 腹を立てて エ 驚いて

問四 傍線部 4 「姫君、病になやみわづらひて臥したり」とあるが、姫君が病気で苦しむ本来の原因は、どのようなことであると考えられるか。本文に即して具体的に三十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問五 傍線部 6 「身の毛いよたちて、そぞろ寒きやうにおぼゆ」とあるが、この時の男の心理を表すのに最も適当な語を、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 困惑 イ 危惧 ウ 期待 エ 感動

問六 空欄 A を埋めるのに最も適当な語を、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 無礼なり イ 不憫なり ウ 当然なり エ 希有なり

問七 次のアイオについて、本文の内容に合致するものには○、合致しないものには×を、それぞれ記せ。

ア 姿が見えなくなつて困つた男は、長年信仰していた観音に助けを求めた。

イ 男は、とうてい入れそうもない扉の隙間すまから牛飼童に引かれ中に入った。

ウ 牛飼童は男に姫君を小槌で打たせて、とり憑いた悪霊を払うよう命じた。

エ 験者の姿を見て恐れた牛飼童は、男を連れて一目散に逃げ出そうとした。

オ 男の姿が現れると、病気で苦しんでいた姫君はすっかり治ってしまった。

